

活動

地球研は大学共同利用機関としてさまざまな活動を行っています。

共同研究

各大学、各省庁、地方公共団体(公的機関)、民間の研究機関、海外の研究機関と連携を図っています。海外の研究者との連携を密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招いています。

研究成果の発信

国内外の学術コミュニティを対象とした「地球研国際シンポジウム」、地球環境問題について幅広い提起を行う「地球研フォーラム」、研究成果を分かりやすく一般市民に紹介する「地球研市民セミナー」、地域の人々と活発な議論を行う「地球研地域連携セミナー」などを実施しています。

刊行物

地球研の成果を一般に分かりやすく紹介する「地球研叢書」、国際社会に向け広く発信する「地球研英文叢書」のほか、研究者の活動内容などを隔月で発信する「地球研ニュース」などを刊行しています。



地球研叢書と地球研英文叢書



地下鉄丸線/京都駅→(20分)→国際会館駅→バス②乗り場→京都バス40系統「京都産業大学ゆき」または50系統「市原ゆき」(6分)→地球研前下車すぐ

京阪沿線/出町柳駅→叡山電鉄鞍馬線(18分)→二軒茶屋駅→(徒歩10分)→地球研

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4

TEL. 075-707-2100(代) FAX. 075-707-2106

http://www.chikyu.ac.jp 地球研



総合地球環境学研究所
所長 立本成文

いわゆる地球環境問題の根源は人間の文化にあります。この視点から、人間と自然系との相互作用のあり方を根本から捉え直そうとしているのが総合地球環境学研究所(地球研)です。人間生活の豊かさが増すにつれて深刻になってきている環境問題を、地球的視野で総合的に研究し、未来可能性のある社会の構築に寄与することを目的としています。

地球研には、連携研究プロジェクト・基幹研究プロジェクトのほかに、準備段階のプレリサーチ(PR)や予備研究(FS)、インキュベーション研究(IS)など多々あります。さらにリポジトリ事業や国際連携事業などを進めています。世界でもユニークな研究機関として、大きな飛躍を遂げたいと覚悟を新たにしています。みなさまのご理解とご支援のほどお願いいたします。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

組織図

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 (2012年4月1日現在)



2012年度 地球研の主なイベント

- 地球研市民セミナー
- 第11回地球研地域連携セミナー
「東アジアの『環境』安全保障：風下・風上を超えて」
2012年6月10日(日) (九州大学東アジア環境研究機構と共催)
於：エルガーラホール・8階大ホール(福岡市)
- 第11回地球研フォーラム
「“つながり”を創る」(仮題)
2012年7月8日(日)
於：国立京都国際会館
- 地球研オープンハウス
2012年8月3日(金)
於：地球研
- 第7回地球研国際シンポジウム
「アジアからの発信—変わりゆく社会と環境」(仮題)
2012年10月24日(水)~26日(金) 於：地球研講演室



地球研オープンハウスの様子

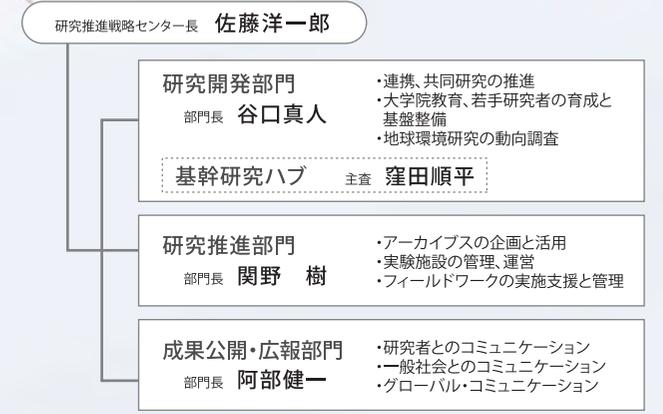
RESEARCH INSTITUTE FOR
HUMANITY AND NATURE

2012

地球研では、人間と自然系との相互作用環を明らかにする研究をさまざまな領域について進めています。研究領域として、循環（主幹：中野孝教）、多様性（主査：嘉田良平）、資源（主幹：門司和彦）、文明環境史（主幹：谷口真人）および地球地域学（主幹：窪田順平）の5つの領域プログラムを設定し、それぞれのプログラムのもとに多様なテーマを掲げた研究プロジェクトを推進しています。
（2012年4月1日現在）

研究推進戦略センター（CCPC）

研究推進戦略センター（CCPC: Center for Coordination, Promotion and Communication）は、領域プログラムや研究プロジェクトの枠を超えた研究所全体を対象とした研究支援を行っています。



人の生老病死と高所環境

—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応

D-03 多様性 本研究5年目 プロジェクトリーダー：奥宮清人



高地では人はいかに生活しているのか。地球規模で進行する高齢化とそれに伴う生活習慣病に「身体に刻み込まれた地球環境問題」として焦点をあてます。高所環境に対する人間の医学生理的適応と「高地文明」とも呼ぶべき生態・文化的適応を明らかにし、近年の生活様式の変化が高所住民のQOLにどのような影響を及ぼしているかを明らかにし、地球環境問題にむけた高所ならではのモデルや知恵を提示します。

主なフィールド：ヒマラヤ・チベット（インド・ラダーク、アルナーチャル、中国・青海省、ブータン）および他の高地との比較

アラブ社会におけるなりわい生態系の研究

—ポスト石油時代に向けて

R-05 資源 本研究4年目 プロジェクトリーダー：縄田浩志



中東の乾燥地域において、千年以上にわたり生き残り続けることができたアラブ社会の生命維持機構と自給自足的な生産活動の特質を明らかにし、ポスト石油時代に向けた、地域住民の生活基盤再構築のための学術的枠組みを提示することを目指します。

主なフィールド：スーダン半乾燥地域、エジプト・シナイ半島、アルジェリア・サハラ沙漠、サウディ・アラビア紅海沿岸

砂漠化をめぐる風と人と土

R-07 資源 本研究1年目 プロジェクトリーダー：田中 樹



アフロ・ユーラシア半乾燥帯は、砂漠化の最前線として知られています。そこは牧畜民や農耕民が様々な暮らしや生業を営む場であり、資源・環境の劣化と貧困問題が不可分に連鎖する地域でもあります。本プロジェクトでは、人々の暮らしと砂漠化現象との関係を明らかにし、極端気象や社会経済的な変動にさらされている地域の複数民族の適応戦略を知り、砂漠化対処と地域開発支援に向けた実効あるアプローチの提案を目指します。

主なフィールド：ニジェール、ナミビア、インド

人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生

D-04 多様性 本研究5年目 プロジェクトリーダー：酒井章子



現在、地球上のあらゆる生態系が人間活動により危機に瀕しています。従来の研究では直接的な影響だけが評価され、生態系ネットワークを介した生態系の崩壊や劣化は十分に扱われていませんでした。わたしたちは、生態系ネットワークの視点を環境問題に活かし、より健全な生態系への再生とその維持への道筋をつけることを目指しています。

主なフィールド：東南アジア熱帯林（マレーシア・サラワク）と中央アジア草原（モンゴル）

メガシティが地球環境に及ぼすインパクト

—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案

C-08 循環 本研究3年目 プロジェクトリーダー：村松 伸



本プロジェクトは、都市と地球環境とが調和する方法を導き出すため、人口1,000万人以上のメガ都市に関して、1) 異なる学問領域、歴史、文化などからメガ都市を統合的に認識する手法の確立、2) 問題低減に向かう統合的解決策の提示、3) 環境、経済、社会の豊かさを統合した都市のあるべき姿の提示、を目標としています。

主なフィールド：開発途上国のメガシティ、特にインドネシアのジャカルタ

基幹研究プロジェクト

風水土イニシアティブ

統合的水資源管理のための「水土の知」を設える

C-09-Init 循環 本研究2年目 プロジェクトリーダー：渡邊裕裕



地球研の「水管理」に関するプロジェクトの成果は、“地域レベルの資源共同管理”のデザインが地球環境問題の解決に欠かせないことを示しています。本プロジェクトでは、世界各地のさまざまな水文や農業の地域において、水管理のあり方を、農業生産、水環境、水管理制度、歴史・文化など、複合的な観点から調査します。研究成果は未来可能性を築く「水土の知」としてまとめ、水管理システムの基本要件や整備のガイドを提示します。

主なフィールド：トルコ、エジプト、インドネシア、琵琶湖湖東地域（日本）など

熱帯アジアの環境変化と感染症

R-04 資源 本研究5年目 プロジェクトリーダー：門司和彦



本プロジェクト The RHN Ecohealth Project は、ラオス・バングラデシュ・ベトナム・雲南等での近年の環境変化と社会変化が、マラリアや肝吸虫などの風土病的感染症・健康プロフィール全体に及ぼす影響を、「エコヘルス」として一体的・分野横断的に記載・分析し、熱帯モンスーンアジア地域の環境と人びとの生活・健康の将来像を考えてきました。本年度は、プロジェクト最終年度にあたり、成果の集約と公表に努めます。

主なフィールド：熱帯モンスーンアジア（ラオス・バングラデシュ・雲南）

東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計

R-06 資源 本研究2年目 プロジェクトリーダー：嘉田良平



人口増加、都市化の進展、土地改変など東南アジア各国で広範囲にみられるさまざまな環境・生態的变化が人々の食と健康に及ぼす影響を及ぼしているかを明らかにし、集水域を単位とするリスク管理の構築を目指します。とくに都市化と人口集中が著しいフィリピン・ラグナ湖周辺地域を重点調査対象とし、諸側面にまたがる汚染や生態リスクの実態などをともに問題解決への政策提言に取り組みます。

主なフィールド：フィリピン・ラグナ湖周辺地域

山野海イニシアティブ

地域環境知形成による新たな commons の創生と持続可能な管理

E-05-Init 地球地域学 本研究1年目 プロジェクトリーダー代行：佐藤 哲



生態系サービスの劣化などの地球環境問題の解決には、地域の実情に即したボトムアップの取り組みの積み重ねが重要です。地域の人々による取り組みの基礎となる新しい知識の構造として、科学知と人々の生活の中で培われてきた在来知が融合した「地域環境知」に着目します。世界各地の多様な事例を収集分析し、地域環境知形成のメカニズムとそれを活かした順応的ガバナンスのあり方を探求します。

主なフィールド：屋久島、知床、石垣島保、綾町、フィジー、アメリカ領バージン諸島、フロリダ州サラソタ湾、マラウイ湖

温暖化するシベリアの自然と人

—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会的適応

C-07 循環 本研究4年目 プロジェクトリーダー：楡山哲哉



シベリアの温暖化は、降水量、融雪時期、河川・湖沼の凍結融解時期、永久凍土の融解など、水循環や雪氷環境に影響します。その結果、洪水の頻度や規模、湖沼の拡大・縮小、森林土壌の湿潤化や乾燥化の変動幅が大きくなり、住宅や農地のみならず、トナカイ牛馬飼育や野生動物の狩猟・漁撈など、地域の人々の生業に大きな影響を与えます。そこで人々がどのように適応し、どの辺りに被害の閾値があるのかなど、現地調査に基づいた研究を進めています。

主なフィールド：ロシア サハ共和国、レナ川流域

東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティの向上

D-05 多様性 本研究1年目 プロジェクトリーダー：石川智士



東南アジアの沿岸域を対象とした生態系の健全性保持と住民の生活向上（ケイパビリティの向上）を両立させるための調査手法と、生態系サービスの利用と沿岸域開発に関する価値評価基準ならびに順応的管理に向けた合意形成のガイドラインを、住民、行政、研究者の協働によるケーススタディーから作成することを目的としています。

主なフィールド：東南アジア沿岸域（タイ・フィリピン）と石垣島（日本）

施設

研究者同士の交流を図る開放的な研究室

地球研にある研究室は、なだらかに弧を描いた全長150mの大空間にすべての研究プロジェクトが有機的な連携をもつよう開放的に設計されています。建物のほぼ中央には、研究者が共通に利用する図書室や情報処理室を配置するとともに、日常的な議論を行うためにサロンのな空間も準備されています。また、地階には、機能に応じた実験室が設置され、研究室と同様、共同利用における利便性と連携性を重視した設計となっています。



研究室

多様な研究に応える18の実験室



質量分析室での作業風景

地球研では、世界各地で採取された天然試料や考古遺物、人工物などを取り扱っています。これらの試料から多種多様な環境情報を獲得できるよう、低温室、培養室、クリーンルームなど異なる機能をもつ18の実験室を整備しています。さらに安定同位体など、人間と自然系の相互作用環研究に新しい情報をもたらす最先端の分析・計測機器を設置しています。